

2 遊行柳（町指定史跡）

芦野宿の北西方、通称上の宮とよぶ湯泉神社の社頭にある。奥羽境に連なる山脈と、余り広くない芦野谷の風物の中に、奥羽の入口の感が深い。柳を訪ねると、土地産の芦野石の玉垣をめぐるし、その中に一本の柳があり、それが幾代目かの柳であり、それは枝垂柳でなくて楊である。



遊行柳（町指定）

傍らに芭蕉の奥の細道紀行の「田一枚」の句碑、近年立った蕉村の「柳散」の句碑とがあり、社の参道の東側には西行の「道の辺に」の歌はここで詠まれたという伝承もあって、その歌碑も立っている。

地元では遊行柳ゆぎんやなぎとおり、遊行の柳とよぶことも稀にあるが、諸文献によると、道の辺の柳、清流流るるの柳、朽木の柳、枯木の柳なども書かれ、それぞれ固有名詞として用いられた。この伝説は、元来柳の老木が、時宗教団の中心人物である遊行上人の移動教化を意味する遊行の旅の途上、化益・濟度されたという主題に、種々と付加物がついて生長・形成されたものである。

一記録によると、遊行一四世太空上人の時（一四一二嗣法、一四三九示寂）で、朽木の柳の精が女性になって現われ、上人の救いを求めたので、上人は随伴の時衆と共に六時礼讃中の日中礼讃を修し、柳の精は成仏して消えうせた。以来代々の遊行上人当地方巡化の時、必ず柳を訪れて法楽・回向することになったという。また藤沢智賢覚書によると、別説が記されている。時は遊行一九世の尊皓上人（一四七一嗣法、一四九六示寂）の文明三年（一四七二）、芦野地方巡錫の時、柳の精が老翁となって現われ、上人から念仏札と十念を授けられて成仏、その化度の歡びに

草も木も洩れぬ御法の声きけば

朽ちはてぬべき後またのものし

と一首を詠み、上人にも返し一首があつて柳の精は消えうせたという。それで遊行柳の名がつき、この地に楊柳寺が創立された由で結んでいる。すなわちこれら二文獻は、一四代と一九代、女性と老翁と相異なるが、地元の伝承や観世信光作と伝えられる謡曲「遊行柳」の筋は

と記している。その次ぎに登場するのが、元禄二年（一六八九）芭蕉の『奥の細道』であり、随行した弟子曾良の『随行日記』である。あまりにも有名であるし、文学の項で扱っているから抄出を省くが、殺生石を訪ねた翌日の旅で、

田一枚植て立去る柳かな

と感懐をこめた一句を詠じている。芭蕉に続いて、その弟子天野桃隣に『陸奥千鳥』（元禄九年一六九六）、児島青房の『奥の小日記』（享保一七年一七三二）、山崎北華の『続奥の細道』（元文三年一七三八）、白梵庵馬州の『奥羽笠』（元文五年一七四〇）などの紀行がある。次に特記すべきは、蕪村の筆跡（小林一三氏の所蔵）によると、

神無月はしめの頃ほひ下野國に執行して 遊行柳とかいへる古木の影に 目前の景色を申出はへる

柳散 清水涸 石處々

とあり、年紀は判然しない。勝峰晋風氏の考証によると、蕪村の三〇歳代の中期頃の作品と推定されている。なおこの句は『復古衾』にも載っている。西行以降の古歌句などを踏まえた秀句であり、芸術的に深く高いものである。

その後さらに暁台に『しをり旅』の付録（明和七年一七七〇）、春秋庵白雄『奥羽紀行』（明和八年一七七二）、東馬庵風耳『紀行文』（同上）、杉板百明『奥往来』（天明三年一七八三）、烏明『烏醉先師懷之抄』（寛政一二年一八〇〇）、浦井突々『旅行記』（文化五年一八〇八）などがあり、近年になって荻原井泉水『奥の細道の道』（大正一四年一九二五）その他多数がある。

なお新古今集の「道の辺に」の歌は、現在になってもこの柳を現地て詠んだものと信ずる人が多いが、この歌は同書に夏の部で題知らずとしてのっている。西行記や西行物語によると、京都において題詠であり、しかも鳥羽院の求めによって詠まれたもの、院の障子の絵画を詠じたという。また絵画の賛として詠まれたものともいう。しかるに黒川春村などは『遊行柳考』なる著を書いて、この歌はここであると本気になって頑張っている。このような情況が古来あるので、その方の話もしだいに成長し、混淆してしまったのであろう。

この伝説の筋は、(1)古来の巨樹・老木などに対する崇拜が基調になる。これから老樹の精霊へ進展するのは当然である。これが朽木の柳や枯木の柳の有する性格である。(2)これはさらに草木国土悉皆成仏の非情物の成仏へ発展する。(3)そこへ広義の歴史的事実としての遊行上人の化益・濟度があつて、遊行柳の伝承は完成される。この話の横系の機能を持ち、種々彩りを添えたのが文学や芸能の世界であり、この話に血液や栄養を注ぎ、また広く流布の役目を果たし、話を育てた。道の辺の柳や清水流るるの柳の名称は、この世界からの幻想を満たすものである。いわゆる遊行柳伝説の内容を右のように分析できるようである。したがって、上記した種々の名称はそれぞれが不可欠の要素であり、それぞれが発達の段階であり、総合されたものが遊行柳伝説の内容なのである。

遊行上人の巡教があると、必ず遊行柳に参詣する習慣になったことは上記した。その時案内の役を勤めたのは、修験の南岳院の法印であった。この始まった年代や由緒については、何か民俗的な問題がありそうであるが、現在は未詳である。また柳の辺りに楊柳寺が設立されて、伊王野専称寺末として存在した。藤沢智寰覚書や遊行五一世賦存上人染筆（南岳院所藏）に楊柳寺の存在が記されている。この寺と南岳院との関係は現在判然しないが、広義の前身・後身の関係にあり、南岳院は楊柳寺の一部分を継承したものと解される。

というのは、現在子孫の南岳院氏に遊行柳関係の詠草類から文献が約四〇点所蔵されており、現地史料として貴重なものである。最も古いものは遊行四二世南門（尊任）上人（二三二八嗣法、一三五一示寂）から芦野民部資俊への札状あり、寛文八年（一六六八）のものである。ほか染筆類に、同上人六字名号軸・同四八世賦国上人書・五〇世快存上人書・五三世尊如上人書・五四世尊祐上人書・五五世一空上人書・五六世傾心上人書・五七世一念上人書・五九世尊教上人書・六一世尊覚上人書・六三世尊純上人書・六四世尊昭上人書があり、これらに随行した僧たちのももあり、短冊や染筆などである。また沙門好問選て黒羽の大場蘭谷書の『遊行柳縁起』（寛延四年三月一七五二）一卷、同人選書の『遊行柳和歌集』（同上五月）一卷、『奉納歌集』（同年成瀬氏が発願し歌を録し奉納したもの）一葉、玉鈞庵枕窓編『遊行柳句集』（宝暦一三年初冬一七六三）巻物一卷などあり、その他一般文人・墨客の詠吟の類もあり、貴重ということができる。

終りにこうした伝説の生れ育った理由・動機は、前記した殺生石の話が成立したものと共通点が多いと思われる。煩をさけて再記しないから、前項殺生石の記述の終りの処を参照されたい。それにしても禅僧と殺生石、日蓮上人と喰初仏、遊行上人と遊行柳など、仏教史におけるそれぞれの位置、民俗としての位置などを考えると、興味のつきないものがある。本柳も伝説地としての意義が重いので町指定史跡になっている。その重要さは殺生石に劣らぬものであろう。

（文献）渡辺竜瑞「遊行柳の研究」雑誌能三卷一一・一二号、昭和二四年

矢部椿郎「芦野の柳」芦華所載の稿は文学史上の問題、殊に文献の一部は裨益する処多大であった。深謝申上げる次第である。